

2-2-6 ハト類

野鳥であるキジバトと、伝書鳩などが野生化したドバト（原種はユーラシア大陸原産のカワラバト）が主な加害種である。キジバト、ドバトとも全長約33cm。キジバトは全体に灰褐色で「デデーポッポー」と繰り返し鳴く。ドバトは色や模様に変異が大きい。



■キジバト

▶ 1. 分布と生息環境

どちらも日本全国に生息する。キジバトは、低地から亜高山帯まで、さまざまな環境で見られる。ドバトは市街地に多いが農村でも見られる。神社や公園で群れているのはドバトである。

▶ 2. 食性

雑草の種子や低木の小果実などを食べる。主として植物質を食べるが、昆虫やミミズなどの動物質を食べることもある。



■ドバト

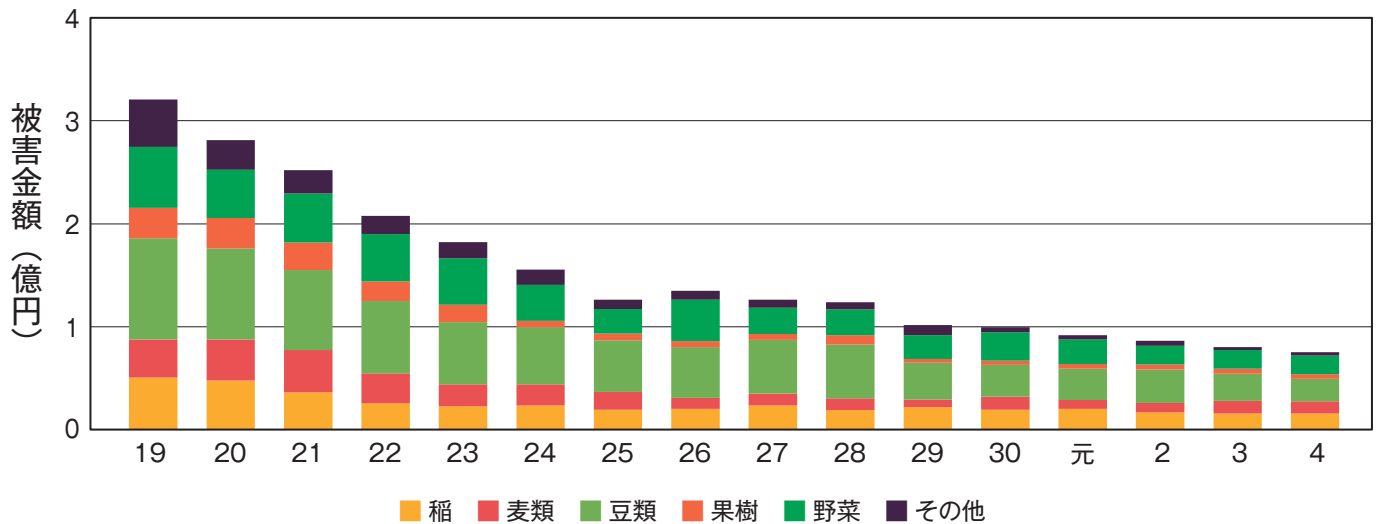
▶ 3. 繁殖や行動等

繁殖期は4～10月だが、暖かい地方では1年中繁殖する。キジバトは林や公園、庭木、街路樹などに、枝を粗く組んだ皿状の巣を作る。また、建造物にも作ることがある。ドバトは、ビルや橋といった建造物、マンションのベランダなど、雨のかからない所に巣を作る。キジバトは1羽か2羽で行動していることが多いが、餌の多いところでは100羽以上が集まることもある。ドバトは基本的に群れで生活しており、東京都の公園では餌やり禁止が呼びかけられるまでは数百羽以上の群れが見られた。

▶ 4. 農作物被害

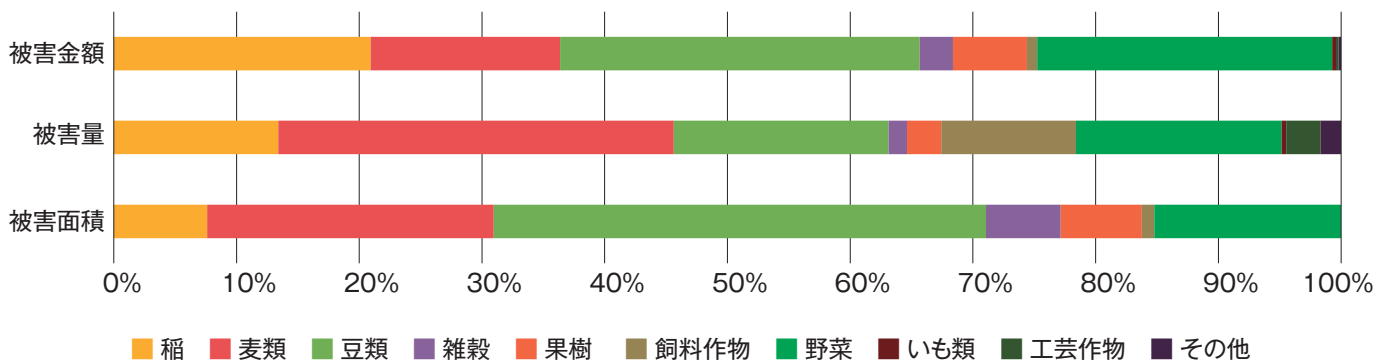
近年の被害は大きく減少傾向にある（図2-11）。被害の対象となる作物は、大豆などの豆類、麦類、稲、飼料作物、野菜など多岐にわたり、いずれも播種期の種子への被害が主である。中でも最も被害を受けているのは豆類で、令和4年度の統計によると、被害面積の40%、被害金額の29%を占める。一方、被害量では麦類が32%と最も被害が多い（図2-12）。大豆に対する被害では、出芽前の種子（豆）や出芽後の子葉に対するものが主で、出芽前の種子や根がついた状態で食べられると欠株となる。また子葉と一緒に生長点が食べられると枯れてしまう。子葉だけの被害であれば、その後も生長を続けるが、被害のタイミングが早いほど収穫に影響を及ぼす。また生育期間の短い品種ほど大きく影響を受ける。出芽から発芽そろいまでの時期に被害が多く、初生葉が展開すると被害はほとんど生じなくなる。キジバトでは、開けた大規模な畑より、林に近い畑などで被害が多い傾向がある。また、畑の一定方向から侵入し内部へ歩きながら採食するため、林からの侵入経路側で被害が多く、中心部で少ない傾向がある。豆類のほかには稲、麦、とうもろこし、野菜などでも同様に播種期に被害を受ける。

図2-11 ハト類による農作物被害金額の推移



データ:「全国の野生鳥獣による農作物被害状況について(令和4年度)」(農林水産省)

図2-12 ハト類による作物別被害内訳(令和4年度)



データ:「全国の野生鳥獣による農作物被害状況について(令和4年度)」(農林水産省)

5. 被害の特徴



大豆

出芽初期の苗では引き抜かれて周囲に落ちていることがある。初生葉が展開を始める頃には被害がなくなる。



大豆

キジバトは出芽した苗の子葉をちぎり取って食べる。子葉を2枚とも食べられた苗の生育は写真のように著しく遅れる。



■ひまわり

キジバトは頭花の上に乗って食べることができる。カワヒワやスズメとは違って、キジバトは種子を丸飲みするため、種皮が散乱しない。



■小麦

麦類の収穫期にもキジバトは食害する。折れて穂が地面につくと食害にあいやすい。